

島川 聖一郎

(玉川学園女子短期大学助教授)

何事につけ、この真相を知りたいと思うのは危険である。そう口にする人間にとっての真相とは必ずしもあるが儘のそれではなく、大抵は、当人がそうあって貰いたいと望むところの「真相」なのである。この真相が明らかになり、「裏切られた」と洩らす彼の一言がその間の事情を如実に物語っている。彼は自分に裏切られたのであり、彼の求めた「真相」に裏切られた訳ではないのである。自分に騙されたことが余程悔しいのか、なかには自分を「裏切る」ような真相を教えた相手に食ってかかる手合いもいるほどである。

上の「真相」を「現実」に置き換えてみても、事情は似たり寄ったりではあるまいか。「お前がこんな女(男)だったとは知らなかった」と言う科白は、恋人同志の間に波風を立たせるときに用いられるものだが、これとて、この科白を口にした当人が、自分の理解力のなかに相手を閉じ込め、相手の理想像を勝手に作り上げ、相手をその鋳型にはめ込んだ結果、それに合わぬ相手を発見し、上のような言い方になるのではあるまいか。いずれにせよ、真相あるいは現実の側には罪はないのである。

ところで、「裏切られた」と公言して憚らぬ人間のいやらしさは、そのヒロイズムにあるのでもなければ、その正直な「告白」にあるのでもない。ひとえに、彼がうそのつけぬところにあるのだ。

吾々はみな己れのうちにエゴイストを一人住まわせている。そういう吾々にとって、真にむずかしいこと、真に勇気のいること、それは誠実ではない、うそをつくことである。うそをつくとは、自分に誠実であるより、他人に誠実であることを重んずるマナーに他ならない。自分に誠実であることが他人にも誠実であるというのは、エゴイズムに過ぎぬ。

己れのうちにエゴイストが住むことを知らぬ人間は、成程、うそとは無縁でいられよう。何故なら己れを隠す必要がないからだ。が、これほど恐ろしいことはない。彼は彼の素面に騙される人間のいることに、遂に気がつくことがないからである。

うそをつくとは、己れの素面に仮面をかぶせることであり、その効用はただひとつ、他人に誠実になるためなのである。更に言えば、うそを以ってしか語れない、あるいはうそを以ってしても語り難い自己と対面したとき、吾々は初めて言葉の真の機能、役割をつかまえることができるのだ。言葉など信用出来ぬと言ってみたとこで始まらぬ。この真相や現実同様、言葉の側には何の罪もないのである。

ワイルドはジッドに向かい、「君の唇は一度もうそをついたことがないみたいだ」と語ったという。無論、現代にも「ジッド」は存在する。世の中には自分に誠実な嘘つきが多いのである。